

ナサニエル・ホーソーン文学における科学と美

——科学者と芸術家の正体——

Nathaniel Hawthorne's Scientists and Artists

野 呂 浩*

I

ナサニエル・ホーソーン作品には、科学者が登場するものが意外と多い。彼の文学世界を代表するような科学者が活躍する小説と言え、やはり、「痣」と「ラパチニの娘」であろう。科学者が主な登場人物であり、また、様々な実験等も描かれているので、科学小説とも呼べようが、決して空想科学小説ではない。また、いずれの物語も単なる変愛小説でもない。

「痣」の科学者エイルマーは、美しい女性ジョージアナと結婚するが、結婚後まもなく、妻の左の頬にある小さな痣が異常に気になり始める。そして、特別に調合した薬でその痣を除去することには成功するが、妻は痣が消えるとともに息絶えてしまうのである。

「ラパチニの娘」では、科学者で医師でもある父親のラパチニ博士によって毒娘に育てられたビアトリーテが、皮肉にも解毒剤で命を落とす羽目になる。毒が彼女の命であるので、解毒剤は彼女の命を奪うのである。

完全性を求めるあまり、愚かにも、最も身近な存在である妻、あるいは、娘の命を奪ってしまう愚かな科学者の物語である。⁽¹⁾ あるいは、19世紀アメリカ社会の、科学に傾倒しすぎる病根を鋭く批判したのだとの解釈もあり、頷ける読みではあ

るが、そのような分析で作品の深部に秘められている謎を垣間見ることが出来るか。ナサニエル・ホーソーン自身の生涯を振り返っても、科学と科学者が抱える諸々の問題を文学上のテーマとして正面から取り上げるほどの関心を持っていたとは到底考えられない。また、性格的に社会との接触をあまり好まないこともあるのか、社会批判に血眼になるようなタイプの人間でもなかったことは誰もが認めるところである。

ナサニエル・ホーソーンの内面にあった重い課題は、生まれ故郷セイラム（もとの意味はヒブライ語で「平和」という意味）の悪名高い1692年の魔女裁判事件に、判事として彼の祖先が重要な役割を演じたという消しがたい歴史的事実である。⁽²⁾ だからこそ、米国を離れて英国リヴァプールの米国領事館で領事として務めていた間でさえも、米国に渡る以前の先祖に何か別な一面を発見出来ないものかと、故国とも呼ぶ英国のあちこちを飛び回るのであった。米国の歴史に、残酷な迫害者として名を留める忌まわしい先祖との決別宣言は、先祖代々の名字の綴り字である Hathorne に w をわざわざ加えて Hawthorne としたことなどにも表れていよう。

このように先祖の魔女事件への関わりに取り憑かれたナサニエル・ホーソーンを踏まえて、作中の人物等を眺めると、姿、形は科学者、医師ではあるが、何やら妖しい特質を持った存在に薄ぼんやりとではあるが見えてこよう。同時にまた、結

*本学基礎・教養、助教授

1995年9月5日受理

果的には毒殺される女性達も、彼女達の実像の片鱗を見せてくれよう。

更に、ナサニエル・ホーソーンの脳裏を決して離れなかったもう一つのことは、当然のことではあるが、先祖の職業などからは絶対に考えられなかった、芸術家、作家として歩む堅い決心にまつわる苦しみであった。「美の芸術家」の主人公であるウォーランドは、元々時計職人であるが、元来、実用的なものにはほとんど関心がない人物である。今では他人の妻になってしまったが、自分の芸術を理解してくれる唯一の女性と信じて疑わなかったアニーの結婚祝いに、自分のすべてを賭けて創った機械仕掛けの蝶を贈る。しかし、無惨にもそれは彼女の子供の手で握り潰されてしまうのである。

この物語は芸術家と社会の厳しい関係を一般的な意味で描いたというよりは、ナサニエル・ホーソン自身が、ピューリタン社会の中で作家として生きていくうえでの熾烈極まりない葛藤を描き込んだ作品であろう。そして、作品中の人物と彼等の職業などは、ウォーランドを除いて、ホーソン自身の先祖を思わせるものばかりであるのも注目すべき点である。

ナサニエル・ホーソーンの生涯持ち続けたそのような問題等と絡めながら、「痣」、「ラパチニの娘」、「美の芸術家」を分析すると、科学と芸術美の問題、あるいは、19世紀アメリカの諸々の問題を扱っているかのような物語の奥に、ナサニエル・ホーソン自身の避けがたい苦悩を垣間見ることが出来る。

II

まず最初に、科学者たちが実際に何をし、その結果どのような結末を迎えたのか。さらに、彼等の諸々の特徴と代表的な解釈を眺めてみよう。

ナサニエル・ホーソンは、38才で、1842年、ソフィア・ピーバデーと結婚する。その翌年発表されたのが「痣」である。それ故、結婚後に妻の欠点がわかったとしても、それを取り除こうとして妻の存在を結果的に否定する愚はしまいと読みたくなるような中身である。⁽³⁾ 作品に登場する主

要人物は、科学者エイルマーと、彼の新妻ジョージアナである。エイルマーは、自然科学のあらゆる分野に通暁している卓越した学者である。ジョージアナの左の頬には手の形をした小さな痣があり、普段は特に目立つこともないが、何かの拍子に少し顔が青ざめたりすると、白い雪の中の一点の深紅の染みのように浮き出てきて、夫エイルマーをぞっとさせるのであった。如何なる人間の寿命でも自由に決定出来る毒薬を創り、さらに、磨いた金属板に光線をあてて妻の肖像を写したりして、自分の科学の力を妻に信頼させてから、エイルマーは、妻の痣を消し去る特別な薬を調合する。そして、その薬で痣を取り除く了解を妻から得る。妻はおいしいと言いながら、夫の指示通りその薬を飲み干す。そして、ジョージアナはすぐに眠りに落ち込むが、眠っている妻のどんな些細な兆候をも、夫エイルマーは逃さず凝視するのであった。頬の高潮の高まり、微かな呼吸の変調は勿論の事、瞼の震え、身体のほとんどそれとわからぬ痙攣などをつぶさに観察してはノートに書き留めるのであった。薬が効き、ジョージアナの痣そのものはすーっと消えかかる。しかし、妻はその時、自分は死ぬと語る。さらに付け加えて、崇高な目標を掲げたことを後悔しないでと、夫を優しく励ますかのようにも述べる。彼女の言葉通り、深紅の色合いが薄れていくにつれて、今や醜い痣が姿を消し、夫エイルマーの望む完全な美となった妻ジョージアナの最後の息は宙に流れ出たのであった。⁽⁴⁾

次に、長女ユーナが生まれた1844年に出版された、「ラパチニの娘」であるが、これも自分の娘が世の毒に汚されないように願う父親の心の作品化にすぎないのではなかろうかとも思いたくなるが、それほど単純な物語ではない。顔には知性と教養が異常に目立つが、心の温かさとは無縁である青白い顔の科学者、ラパチニ博士は、毒の花などが繁茂する庭園を持っている。⁽⁵⁾ 彼は、植物性毒物にあらゆる医療効果があると信じている。そして、診察する患者は、新しい実験材料としてしか興味がない。それに、これまで蓄積された科学的知識に、ほんの一粒の芥子種ほどの知識を付け

加えるためには、自分の命はもちろんのこと、他の人間の生命、さらには、どんなに大切なものでも犠牲にして構わないと考える人間なのである。彼は、『自然』さえもそれで世界を苦しめることに躊躇したような、恐ろしく有害な毒を何種類か創ったとさえ言われている毒薬博士でもある。そのような博士の一人娘であるビアトリーチェは、世の毒に負けることのないように、すでに全身が毒化されているのである。彼女の手の中で花は萎れ、彼女が見つめると飛んでいる蝶なども元気を失い、小刻みに震えて死んでしまう程の猛毒娘なのである。彼女の恋人となったジョヴァンニも、露に濡れた花に目をやると、花はもう萎れはじめ、また、有毒な感情のしみこんだ息を蜘蛛に吐きかけてみると、その蜘蛛は足を痙攣させてぎゅっとすぼめると、窓のところに死体となってぶらさがってしまう程である。ビアトリーチェの猛毒がジョヴァンニの肉体にもしみこんでしまったのである。2人はまったく同じ毒人間になったのである。ジョヴァンニは、ラパチニ博士のライバルでもある、パドア大学の有名な科学者から解毒剤をもらう。そして、それをビアトリーチェに奨めて飲ませるが、彼女は毒が命であったので、その強力な解毒剤によりビアトリーチェは命を落とすのである。

2人の科学者に共通する特徴を探するのはそんなに困難な作業ではない。まずは、生身の人間よりも科学に異常なほど興味を示すことである。そして、何よりも実験が大好きである。そして、どちらの科学者も薬に深い関心を持っている。実験の一部始終を科学的な探求心をもって、自分の目で覗き込むことも2人の科学者の共通点である。しかも、そうした実験の対象は動物等ではなく、常に人間であり、しかも、必ず男子ではなく女子である。さらに、物語はそのような女性の死で閉じることにも共通の特徴である。

痣は原罪の象徴であり、その原罪を取り除こうとする科学者の傲慢を扱う世界であるとも読めよう。また、19世紀前半の、科学に全幅の信頼をよせる一般のアメリカ人そのものがエイルマーであり、科学の進歩にたいする信頼がジョージアナで

ある。科学力で原罪を取り除き、エデンの世界を創造したと喜ぶその直後にジョージアナが死亡するのは、科学によるパラダイス追求を否定しているのである。科学により、却って人間がコントロール出来ない破壊へとつながって行く危険性を指摘しているとの読みは説得力に富む読みではある。⁽⁶⁾ しかし、こうした解釈は、ナサニエル・ホーソーンの文学作品を19世紀アメリカ社会の文化的資料として捉えるゆえの結論であろう。

自分の妻を毒蛇のワインでさらに美しくしようと実験して結果的に殺してしまう17世紀の英国の科学者を下敷きにして書いたとか言われる物語である。⁽⁷⁾ それに、エイルマーが特に薬の調合に熱心で、その薬を妻に用いる。その妻は聖なる犠牲のイメージがあることなどを拾いあげるだけでも、少なくとも、科学を主要テーマとした物語ではなく、ましてや、直接19世紀アメリカ社会の時代性、アメリカ性を批判している書であると断定するのは少し無理であろう。作品の時代設定は18世紀である。確かに、ナサニエル・ホーソーンは19世紀に生きた作家なので、彼の作品には、19世紀の時代的、文化的状況がそれなりに反映しているように、特にある特定の時代性、文化的状況の検証にのみ没頭する作家ではない。魔術師のような匂いがするエイルマーの特質やら、毒殺とも言える彼の妻ジョージアナの死を別な観点から分析してみる必要がある。

ラパチニ博士の庭園は、科学力によって破壊されたアメリカであり、娘の死はアダム的アメリカ人の楽観性批判であるとの解釈も、やはり、ナサニエル・ホーソーンの文学作品を、19世紀のアメリカが反映している文化的資料としてアプローチすると必然的に辿りつく結論であろう。⁽⁸⁾ 折られた花の茎の雫で蜥蜴が即死するような、強力な毒液を持つ草花の生い茂る庭園の世話に熱中する、青白い科学者、ラパチニ毒薬博士。本当は純粋な天使であるとも記されている彼の一人娘ビアトリーチェ。彼女が自分の頭のまわりを飛ぶ蝶を喜んで見つめていると、その蝶は彼女の足元に落ちて死んでしまうような場面などから判断するならば、「痣」に劣らない不気味な雰囲気が漂う小説で

あり、ナサニエル・ホーソーンが生きた 19 世紀アメリカ社会の科学一辺倒の一般的風潮を批判している書であるというだけでは片付けられない何か、物語の奥に秘められているのではないかと思わせる作品である。

III

芸術家の遭遇する問題が凝縮した形で盛り込まれているのが、「美の芸術家」であろう。その作品も 1844 年に世に出た物語である。元々時計職人だったウォーランドではあるが、彼は、実面的な面にはまるで関心がなく、むしろ優美さのみ求める芸術家タイプの人間である。彼は、実際に蒸気機関車を見にいったことがあるが、巨大なサイズだけでなく、機械類の型苦しい、規則的な動きを見ると、異常な嫌悪を感じて気分が悪くなるのだった。⁽⁹⁾ ナサニエル・ホーソーン自身も蒸気機関車に関してはまったく同じ実体験をしている。作中には、たとえ人類を敵にまわしたとしても、芸術家は自ら自分自身のただ一人の弟子とならなければならないのだとも述べられている。また、どのような芸術家でも美の観念を心の中で楽しむだけでは満足出来ず、それに外なる現実を与えなくなるようだとも書かれてある。

ウォーランドは、最終的には、物質の精神化に専念する。具体的には、機械仕掛けの蝶を作り、それに生命を宿らせるのである。しかし、計画の途中で突然死ぬのではないかとこの恐れも抱く。父親が 4 才の時に亡くなったこともあり、ナサニエル・ホーソーンも、芸術作品を完成する途中で死ぬのではないかと恐れていた内面の恐怖の反映であろう。それでも、彼の蝶は遂に完成する。その蝶の輝かしさ、壮麗さ、繊細さを人間世界の言葉で言い表わすことは不可能な程である。自然の色褪せた形ではなく、幼い天使や天に召された幼児たちの霊が戯れることが出来るような、天国の草原を飛びかう姿であった。ウォーランドの説明によれば、その蝶は、彼のすべてを吸い込んでいるのである。つまり、その蝶の外面的な美のみならず、その組織全体に一人の美の芸術家の知性、想像力、感受性、魂が表現されているのである。そ

して、それは、自然の蝶ではなく、芸術家の創造作品なのである。しかし、この蝶が、無惨にも、鍛冶屋と結婚したアニーの子供の手で握り潰されてしまうのである。そして、その残骸を見つめている彼はまったく別の蝶を捕まえたとの説明が続く。

ウォーランドとアニーの恋愛小説、芸術家と社会の関係、芸術性と実用性等の関連などを考えさせてくれる物語ではある。しかし、ナサニエル・ホーソーン之母方の先代には、18 才で英国から米国に渡り、鍛冶屋からスタートする人物が実際におり、また、鍛冶屋の娘と結婚した祖父、ダニエル・ホーソーン (1731-1796) もいる。ウォーランドが最も忌み嫌うのが、肉体的な力であり、精神的な繊細さを持たない鍛冶屋である。そして、自分の女神と信じていたアニーはその鍛冶屋と結婚してしまうのである。このように眺めてみると、やはり、作中にホーソーン自身の赤裸々な先祖批判が織り込まれていると読むのが自然であろう。

芸術の価値を解せず、芸術家をときには悪魔に仕える魔術師であるかの如く考えてしまうピューリタン社会で、たとえ、どのように冷たい視線に晒されても美の創造に自分の生涯を賭ける決意の人物ウォーランドは、ナサニエル・ホーソーンその人である。実際に、ウォーランドと同じような決意をし、ピューリタン社会からの厳しく冷たい様々な仕打ちを経験したナサニエル・ホーソーンは、美の芸術家ウォーランドと完全に重なる。

しかし、なぜ、かくも文学作品の中に、明らかに先祖を忌み嫌っているということが分かるほどの激しい内容を書かなければならなかったのか。先祖の何がホーソーンをそのようにさせているのか。ナサニエル・ホーソーン自身が抱えていた重大問題と絡めながら再検討しなければ物語の深層は見えてこない。

IV

魔女狩りの歴史は、13 世紀のフランスから始まり、16 世紀をピークとしてやがて西ヨーロッパ全土、さらには、17 世紀末に新大陸アメリカのニューイングランドにまで及ぶのである。犠牲者

の数は30万、あるいは、900万とする説もあるほどで、とにかく、現在の常識から判断すれば何ら死刑に値する犯罪はないのに、多くの女性が魔女として訴えられ、酷い拷問を受けた後に火刑になる悲惨極まりない歴史である。組織的な魔女狩りが行なわれたのは、キリスト教国以外ではなく、1600年をピークとする、前後3、4世紀間に限られていたこと、さらには、このような残虐極まりない魔女狩りが、中世の暗黒時代においてではなく、合理主義とヒューマンイズムのルネサンスの最盛期に起きたのである。

ニュー・イングランドに飛び火した、1692年の「セーレム魔女事件」には、ナサニエル・ホーソーンの祖先が、魔女を裁く側として関わったのである。

ナサニエル・ホーソーンの生まれ故郷であるセイラムの魔女事件を振り返ってみると、セイラムのサムエル・パリス牧師は、彼の黒人奴隷の不思議な宗教儀式をいつも見ていた10代の娘達がなぜか異常な挙動をするようになった。そこで、この娘達が魔女の妖術にかかったという噂が広まって魔女狩りが始まったのである。魔女と疑われた人物はセイラム周辺で200人近くにもなり、そしてまもなく20名が絞殺された。⁽¹⁰⁾

米国ホーソーン家初代のウィリアム・ホーソン(1607-1681)は、クエーカー教徒に鞭打ち刑を命じたりもした、非常に激しい迫害者の性格の人物だった。そして、彼の、長男ジョン・ホーソン(1641-1717)は、教育を受けた立派な人物であったが、セイラムの魔女裁判事件で少なくとも18人の絞殺に立ち合ったようである。ナサニエル・ホーソン自身はこのような先祖の忌まわしい歴史を決して忘れることはなかったのである。

作家ナサニエル・ホーソン個人の生涯には、特に目立つような事件などなく、比較的平穏無事な人生であるとも考えられるが、このような魔女裁判の他にも、母方の先祖には、2人の姉と近親相姦事件を引き起こしたニコラス・マニング(1644-?)という、18才で英国からアメリカに渡り、鍛冶屋からスタートした悪名高い人物などもあるのである。彼の姉達は、近親相姦を意味す

る、incestの頭文字Iの文字が書かれたビラを貼られ、人々の前に晒され、鞭打ち刑を受けたのである。1681年の事件であるが、この裁かれる現場をジョン・ホーソンも町の多くの人々と一緒に見ていたのである。そして、1692年の魔女裁判に判事として彼が加わるのである。なお、近親相姦事件を引き起こしたニコラス・マニングの兄弟トーマス・マニングがナサニエル・ホーソンの母親の曾祖父であることなども知ると、ナサニエル・ホーソン自身が、特に魔女裁判の歴史と先祖のことが絶対に拭い去ることの出来ない、心穏やかなめ課題として捉えている理由がよく理解出来るのではなかろうか。「アリス・ドーンの訴え」、「七破風の屋敷」などのように、魔女裁判の歴史を下敷きに書いたと断定してもよい物語がある程である。

セイラムの魔女事件に話を戻すと、やがて、事件の発端となった娘たちも正常になり事実を語りだした。その結果、獄中の被告全部を結果的には知事が無罪放免した。裁判官サムエル・シュアールは全判決が根拠がないことを最終的に認めた。魔女狩りに熱心だったのは宗教家だけではなく、すぐれた研究業績を持ち、近代科学の輝かしい殿堂だったロンドン王立学会の一員でもあったコトン・メーザーも異常なほど熱心だったのである。「アリス・ドーンの訴え」では、まわりの群衆全体を狂気に駆り立てるサタンの友人メーザーと説明されている。そして、ナサニエル・ホーソン自身も自分には、このコトン・メーザーと同じような血、つまり、人間を絞首刑にしたがる血が流れているのだとの認識を持っていたことも忘れてはならない。

このように、魔女狩りと先祖の歴史に憑かれたナサニエル・ホーソーンの実態を知ると、そうした視点から、今回取り上げた作品を読みなおしたくなるのは極めて自然なことである。

もう少し、魔女の歴史を眺めると、実際には何の罪もないのに、魔女と勝手に烙印を押された多くの女性達は、魔女ではないといくら告白しても受け入れられず、最終的には火あぶりの刑になるのを知っていた。だからこそ、生きたままで焼か

れるのではなく、絞め殺されてから焼かれることを願ったものも多かったらしい。そして、裁判官たちは、火で焼き殺された魔女の数だけキリストの国が浄化されたことを喜ぶ有様だった。⁽¹¹⁾

旧約聖書に使用されている、ヘブライ語の魔女のものと意味は、「毒殺する者」という意味である。⁽¹²⁾ 薬草などから、薬を調合するのも、歴史的に魔女の行為と考えられている。ならば、ナサニエル・ホーソーンの小説にも、嬉々として毒薬に取り憑かれた毒殺者と呼びたくなる登場人物がいるのではないか。

V

「毒殺する者」が魔女であれば、科学者エイルマーは勿論、ラパチニ博士も魔女的行為を行なう魔女そのものではないか。彼等の動機には特に邪悪さはない。妻の頬にある痣を消し去り完全な美を実現したい願望、自分の娘を世の毒から守ることなど誰もが理解できる良き動機であろう。しかし、エイルマーは、妻の痣は生命の奥深いところに関わるものであり、夢で、痣が心臓の中に逃げ込んでも無理矢理それを切り取ろうとする危険極まりない試みであることを十分知らされても実行に移す科学者である。人間心理の奥深い真相を表わすのにナサニエル・ホーソーンはよく夢を用いる。

また、ラパチニ博士は、分厚い手袋をはめ、さらに、口と鼻をマスクで覆い、毒の力が及ばないように防備体制十分の用意周到な学者である。一方、娘には何も特にそのようなものを身に付けさせず、毒性植物と戯れさせて毒女に育てあげるのである。ならば、夫エイルマーと、父親ラパチニの行為は、計画的、意図的行動であることは明らかである。そして、二人の科学者には、死に繋がる危険性を十分認識している故、一種の殺意らしきものを嗅ぎ取ることも出来る。

2人とも自分の妻、娘の臨終の場面で特に慌てふためく、あるいは、人間的な悲しみで震えるような描写はない。これだけでも、彼等は、並みの人間としては描かれていない、否、寧ろ、人間ではなく、感情を持たない観察機械化した姿が強調

されていると読んでもよからう。過失致死のようにも思われようが、実は、立派な計画的殺人であるとも見做すことが出来る。確かに、妻ジョージアナの了解を得てから実行するし、ピアトリチェの場合も決して無理矢理ではない。しかし、実に巧妙なやり方ではなかろうか。考えてみれば、夫エイルマーに、妻としては最終的に従わざるを得ないし、ましてや、ピアトリチェは娘であり父親に反抗出来ない弱い立場にあるのだ。

2人の女性は、もしかするとその薬で自分の命を落とすことになる危険性をうすうす感じつつ飲み干すようである。夫エイルマー以外の人には、チャーミングポイントと映るのに、夫だけは、妻の痣をぞつとするものに捉えるのである。顔を合わせる度に自分の顔を見て震えあがる夫と生きていくことにこそ生地獄そのものではないか。また、自分の吐く息で昆虫は息絶え、自分の手の中で花が萎れるほど毒に染まった肉体で生き続けることこそ空恐ろしい地獄そのものではないか。彼女達が死につながるかもしれない薬を飲む選択をするのも、死こそが残された唯一の選択だからであろう。まさに、絶えられない拷問で苦しめられ、最後には生きながら焼かれる火刑よりも、首を絞められてから、焼かれることを願う魔女たちと同じような選択ではないか。つまり、死こそ唯一の幸福な選択なのである。息を引き取る瞬間も、夫や父親を露骨に批判するような言葉を吐けない姿など実に痛々しいではないか。ピアトリチェの、毒よりも愛が欲しかったとの言葉は、魔女として処刑された女達の苦痛と叫びを十分理解しているからこそ描ける、誠に短いありふれた言葉ではあるが、万感の重みがある表現である。

さらに、ジョージアナは天に飛翔し、ピアトリチェの本当の姿は天使であるとも明言されていることなどから判断するならば、ナサニエル・ホーソーンは、犠牲になった魔女の名譽回復を作品の中で実現し、彼女たちを聖なる犠牲として描いていることが分かる。いずれにしても、毒殺される人間は、両作品ともに女性である。

魔女という表現は作品中にはどこにも使われていないが、毒殺する者が魔女であれば、2人の科学者

は明らかに魔女であることは既に行った通りである。また両科学者には殺意に似たようなものがあることも既に述べた。ラパチニにしても、エイルマーにしても、まるで死神のような人物として紹介されている。両者とも青白い科学者という表現では同じだが、エイルマーは死人のような真っ青な顔の科学者と説明されている。実験をする緊張感ということもあろうが、表情も内面を表わすわけだから、人間としてのあたたかみを欠く人間失格者、いや、寧ろ、死神が科学者に化けていると言っても過言ではなかろう。

科学と科学の問題点などを描くだけならば、毒薬、毒草庭園、毒娘、毒殺される女性が登場するのは不自然であり、まるで「毒薬小説」と言っても過言ではない作品世界である。魔女裁判の生々しい拷問、火刑の場面などは皆無であるが、このように検討してみると、科学者達と、彼等の実験の対象となる女性達を見るならば、魔女裁判の歴史、さらにはそれに憑かれているナサニエル・ホーソンの姿がダブって見えてくる。

また、ナサニエル・ホーソンは、歴史上のある特定の時期だけを特に問題視する作家ではないことも既に触れたが、2作品の時代背景は18世紀であり、しかも、「ラパチニの娘」はイタリアが舞台である。これを文字通り受け取るならば、今まで検討してきた私の解釈は根も葉もない戯言となろうが、「ラパチニの娘」の冒頭には、ホーソン自身の出版の歴史と思われる事項が書かれてあり、自分の小説は、過去の歴史や、今日の世界を舞台とすることもあるが、そうした特定の時間や空間は関係ないこともあったと、わざわざ書き添えてある。時代や場所はそれなりの意味はあるが、それらに心を奪われすぎて物語の本質を読み違えてはならないことをわざわざ記したのであろう。18世紀の科学的業績ならびに、19世紀の科学社会を描いているようであっても、それはあくまでも舞台装置であり、その舞台装置で演じられる物語の、時間や空間で推し量れない本質を突き止めることが肝要であろう。勿論、舞台装置そのものにもそれなりの意味があるのは当然である。経験に基づく「女性の科学」を駆逐するのに貢献した医

学教育で有名な、しかも近代科学の父とも言われるガリレオなども教えたパドヴァ大学を「ラパチニの娘」に描くことなどは、見事な舞台装置と言えよう。⁽¹³⁾ それゆえ、舞台装置の研究そのものだけでも膨大な研究になろう。

よく、ホーソンの文学作品の女性はリアルに描かれていないとも言われるが、今回の2作品では違うのではないか。死に際を冷静に観察される女性、女性の邪視により蜘蛛などが震えて息絶える、女の手の中で花が萎れはじめる場面、夫、父親の意向に最終的には従わざるを得ない悲しい性などは、誠に読者を震え上がらせる、あるいは、共感を誘う描写と言えよう。

歴史上の様々な魔女裁判では、魔女と認定するのに魔女マークが重要な決め手となったことも事実である。極度の恐怖感を与えるジョージアナの痣は、夫エイルマーにとっては、絶対にそれを取り除くたくなる程の、恐怖の印、一種の魔女マークと解釈したくなるような肉体的印であろう。ビアトリーチェの邪視により昆虫などが死ぬ場面もあるが、トマス・アクイナスなどはこうした邪視こそ魔女の印であると述べている。⁽¹⁴⁾ 勿論、ビアトリーチェの邪視は、毒薬博士であるラパチニの創ったものであり、その意味でビアトリーチェ自身でなく、ラパチニの邪視なのだが、魔女マークとしてよく知られている「蜘蛛」などが登場するのも、やはり魔女のことを扱っているなと思わせる一つの要因でもある。

ところで、科学者だけが魔女的性格を持つ人物として、ナサニエル・ホーソンの作品世界に姿を現わすのではない。普通の人間が考えられないような高い理想を抱いて何かに夢中になる人間がよく魔性的な人物として描かれる。それゆえ、科学者だけでなく、芸術家、宗教家などがよく主要人物として登場してくるのである。⁽¹⁵⁾ そして、彼等は、社会から孤立し、グロテスクな存在に変質していく場合が多い。何かに囚われすぎて、普通の感覚を失う人間の悲しい心の現実とその反映である歴史を、作品の世界に蘇らせているのである。魔女の最大の特徴的行為である、「毒殺する者」を描くのになにが科学者や医師であるだ

けで、それ以上の意味が科学と科学者に与えられている訳ではなかろう。

VI

「美の芸術家」はただ単に、芸術性と実用性、美の定義、芸術家と社会の関係等を一般的に論じた作品ではないことは既に触れた。作品に、鍛冶屋が登場し、その鍛冶屋と結婚した最愛の女性も登場し、三角関係を扱う恋愛物語のようでもあるが、実は母方の先祖に鍛冶屋があり、鍛冶屋の娘と結婚した伯父がいることなども既に指摘済みである。それゆえ、先祖のように肉体的な力を使う鍛冶屋などを忌み嫌い、自分は精神的な仕事につくのだという、ナサニエル・ホーソーン自身の、先祖との決別宣言と読める。過去の歴史をホーソーンはよく作品執筆に使う。しかも、それは、舞台設定のみに使う場合もあるが、実に巧妙に歴史的事実を折り混ぜながら、そこに、自分の先祖観や芸術家としての諸々の問題を織り込んだのが、この「美の芸術家」である。

ピューリタン社会では、すぐれた芸術作品などは魔術の産物と見做す者も多く、芸術家として生きていくのは並大抵の神経の持ち主では出来ないことを百も承知なのである。だからこそ、全世界を敵にまわしても自分自身だけは、唯一人、自分の弟子にならなければならないとの件も、ホーソーンがどんなに厳しい環境でも一歩たりとも後には引かず、自分の掲げる美の道に献身、殉じるんだとの必死の決意表明だと解釈出来る。

また、芸術家のすべてを注ぎ込んで創造した蝶が子供の手で握り潰された最後の場面も、美の創造まで達した芸術家はもう目に見えるとかの具体的な形は問題でなくなったのであり、壊されても平然としていたとの説明を文字通り解釈するのは多少無理があるのではなかろうか。鍛冶屋とアニーの子供といえ、ホーソーン自身を含む先祖の子孫なのである。とするならば、ホーソーン家に脈々と受け継がれて来ている、芸術を解しないどころか、迫害者のような厳しい性格、力が最終的に勝利するのではないかという危惧を抱えていることなのだ。最後の動じない姿勢はこうした危

険性を十二分自覚、認識している姿である。

美の定義として注目すべきなのは、やはり、生命の重要性を主張している点であろう。どんな芸術作品も生命があってこそ美なる存在になる。その意味では、「飛べる」蝶を創造したのは、生命を持つ美の作品を完成したと受けとめるべきで、子供が壊したのは飽くまでも機械なのである。

このように検討してみると、先祖が魔女裁判に関わった歴史的事実に基づく痛みが、芸術家として生きる決心に繋がってくる。ナサニエル・ホーソーンが、何ら死罪にあたる罪などない女性を「魔女」として処刑する決定に加担した歴史的事実のナサニエル・ホーソーンなりの捉え方そのものが、無抵抗な女性が人間性の欠如した科学者の実験の対象となって結果的には毒殺される物語に影を落としているのだ。魔女的特質は女性ではなく、科学者に描かれている。だから、科学者が魔女であると宣言しているのだと単純に結論づけられるのではなく、ホーソーン自身の先祖に見られるような、一種の狂気とも呼びたくなる、殺意に似た迫害者の特質を科学者に描いていると解すべきだろう。

したがって、表面的には、科学者ならびに芸術美の問題を扱っているようであるが、先祖に関わった魔女事件の呪いと自分の生きざまの狭間で呻吟するナサニエル・ホーソーンの姿、つまり、先祖と自分の血に内在する癒しがたい病巣への痛烈な批判と憤り、そして、そのような先祖伝来の烈しい血を自分は、生命を殺害するためではなく、美の生命創造のために用いるのだという並々ならぬ決意が、「痣」、「ラパチニの娘」、「美の芸術家」の3作品の奥深い所に影の如くちらついていると纏められるのではなかろうか。

蛇足になるが、魔女的性格はどうも、科学者であれ、宗教家であれ、芸術家であれ、男性にのみ付与されている。そしてさらに、今回扱った物語では、女性を実験の対象としてその一部始終を冷静に観察、否、覗く姿などは男のサディズムとも呼びたくなるものである。魔女的本質は男のサディズムであり、それこそが、女を殺害する真犯人なのだと読めそうな気がするが、今後、魔女

裁判事件だけでなく、近親相姦事件にも悩むナサニエル・ホーソーンを視野に入れて作品を読みなおす必要があろう。

注

- 1) R. B. Heilman, "Hawthorne's 'The Birthmark': Science as Religion," *The South Atlantic Quarterly*, XLVIII (October, 1949)
- 2) F. O. Matthiessen, *American Renaissance* (Oxford: Oxford University Press, 1972), pp. 341-342.
- 3) Robert Gale, *A Nathaniel Hawthorne Encyclopedia* (New York: Greenwood Press, 1991), p. 41.
- 4) "The Birthmark" は, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Columbus: Ohio State University Press, 1965), X *Mosses from an Old Manse* に収められている作品を使用。
- 5) "Rappaccini's Daughter" も, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Columbus: Ohio State University Press, 1965), X *Mosses from an Old Manse* に収められている作品を使用。
- 6) 大井浩二, 『ナサニエル・ホーソーン論 アメリカ神話と想像力』, (東京: 南雲堂, 1974), p.88 参照。
- 7) *A Nathaniel Hawthorne Encyclopedia*, pp. 22-23.
- 8) 『ナサニエル・ホーソーン論 アメリカ神話と想像力』, p.110 参照。
- 9) "The Artist of the Beautiful" も, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Columbus: Ohio State University Press, 1965), X *Mosses from an Old Manse* に収められている作品を使用。
- 10) 森島恒雄, 『魔女狩り』, (東京: 岩波書店, 1979), pp. 184-185 参照。
- 11) 『魔女狩り』, p.122, p.160 参照。
- 12) 『魔女狩り』, p.17 参照。
- 13) 高橋義人, 『魔女とヨーロッパ』 (東京: 岩波書店, 1995), pp.74-75 参照。
- 14) 『魔女とヨーロッパ』, p.39 参照。
- 15) Terence Martin, *Nathaniel Hawthorne* (Boston: Twayne Publishers, 1983), p.54.